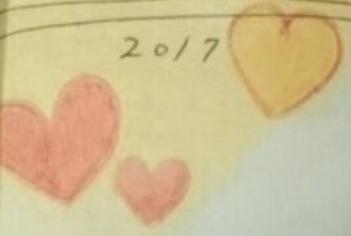


Dear Gubbie

2017



Y. Haman

誕生日

もうすぐ10歳の誕生日、という初夏のある日、ちいごはんを食べなくなりました。お腹の具合でも悪いのかと思い、かかりつけの先生に診てもらうと、

「重度の貧血です。脾臓に何か異変がありそうなので、すぐに摘出しなければなりません。」

とのことでした。ちいは誕生日に入院し、翌日が手術日でした。先生は、

「ちいちゃん、今日が誕生日なんですね。」

と気づいてくれました。ちいがうちに来てから十年、ずっと見守ってくれているやさしい先生です。

お腹の中にあってはならない液体状のものがたくさんあって呼吸が苦しいこと、どこかに腫瘍があるかもしれないこと、脾臓という血液をため込む臓器が腫れていることと、それが破裂するリスク、脾臓はなくても生きていけることなどを、順を追ってわかりやすく丁寧に説明してくれました。

選択の余地のない状況であることは私にも理解できました。ちいを先生にお願いして家に帰るしかありません。考えたくはありませんでしたが、腫瘍がもしも悪性だったら...という覚悟はしておかなければなりません。ちいを先生に預けて帰宅する途中、「今晚、仕事を終えて家に帰っても、ちいはいないのだ」と思うと、涙が出ました。

誕生日の翌日に手術し、数日病院に泊まったちいは、帰宅したあと日に日に元気になってゆきました。首のまわりには傷をなめないよう、大きな襟状の防具をつけられ、パラボラアンテナの中から頭を出しているような状態で気の毒でしたが、ごはんもよく食べ、家の中を走り回りました。ちいがパラボラで闊歩するたび、れんは轢かれるのを恐れて道をゆずりました。ソファにも飛び乗ったりするので、お腹の傷がソファのへりでこすれて、床の敷物が血だらけになってしまいました。その日家にいた夫と娘がびっくりして、ちいを病院へ連れて行きました。私が仕事で家にいないときにそんなことがあると、家族はたいへんです。

ちいは傷がひらかないようにお腹に包帯をまいてもらいましたが、胸のサイズが大きく、ウェストが極端に細いため、包帯がすぐに後ろ側へずり落ちてしまい、役に立たないハラマキをしているだけになってしまいました。結局ちいは病院で服を着せられ、その後は家の中が血まみれになることはなくなりました。

手術のおかげで貧血も徐々に良くなり、脾臓の病変の検査結果も悪性ではなかったのも、家族みんなでほっとしました。ただ、気がかりなことはありました。手術のときに先生は、脾臓だけでなく、臓器をすべて眼で確認してくれましたが、どこにも病変が見つからないのに、お腹に液状のものがうっすら染み出てきており、完全にはなくならないことでした。このまま染み出るのが続いてしまうと、だんだん元気がなくなり、やがては静かに亡くなっていきます、と先生は教えてくれました。がんはどこにも見つからないのに、いったいどういうことなんだろう、と不安になりました。先生は、大学病院を予約してくれて、ちいは精密な検査を受けることになりました。検査の予約日は、手術から1か月経った暑い夏の日でした。

ちいは、検査の日までにお腹の水がたまり、呼吸が苦しくなるためごはんを食べなくなり、かかりつけの先生に水を抜いてもらいました。

精密検査

ちいは、大学病院の動物医療センターに行き、腫瘍科の精密検査を受けました。予約の時間は午前11時で、結果が出るまでの長い長い時間を、夫と待合室で過ごしました。やがて午後になり、センター長を務める腫瘍科の先生の口から、

「残念ですが、心臓に腫瘍があります。」

という言葉聞いたときには、いろいろな覚悟をしていたはずなのに、動揺しました。心臓という、私が想像もしなかった場所に、腫瘍があるのです。先生は、心臓の中の壁に腫瘍があり、それが原因で全身の循環が悪くなっており、胸とお腹にたくさんの薄い血液状の水分がたまり、呼吸が苦しくなっているのだと説明してくれました。心臓は、心膜という袋に包まれているため、腫瘍のせいで心臓が破れても、大出血することはなく、心臓が破れたら5分くらいで死に至ります、今は、いつ心臓が破れてもおかしくない状態です、という説明をしてくれました。腫瘍の大きさは、2〜3センチくらいということでした。私が「この子の心臓は、どのくらいの大きさなのですか？」

と尋ねると先生は、ご自分のこぶしをみせて、このくらいですね、と示してくれました。小型のブルドッグでずんぐりした体形なので、想像以上に心臓が大きいのでした。人間の心臓も、自分のこぶしくらいの大きさである、とどこかで聞いた事があるような気がするので、そんな大きな心臓なら、2センチの腫瘍はたいして大きくないのではないのかしら、と、自分に都合のよいように考えました。このまま腫瘍が育たなければ、ちいは1年とか、もっと長い期間、なんとか生きていられるのではないかと勝手に考えたりもしました。「いつ心臓がやぶれてもおかしくない」という表現は、いつ亡くなってもおかしくない、ということですが、理解したくはありませんでした。先生は、抗がん剤は、元気がないときに使用すべきではないこと、何も治療しない、という選択肢もあることを繰り返し教えてくれました。私は、ちいが死に至るまでの間の痛みや苦しみを、少しでも軽くしてあげることができないでしょうか、と聞きました。先生は、胸に水がたまってきたら呼吸が苦しくなるので、その水を抜いて楽にしてあげることができることと、止血効果のある飲み薬と、ステロイドを含む飲み薬があることを説明してくれました。ちいは、薬を飲み込むことが難しいので、何か飲みやすい薬はありませんか、と相談しましたが、それは無いようでした。その日私は午後から仕事があり、ちいの治療が終わるのを待つことができなかったため、夫に頼んで病院を後にしました。

ちいの胸とお腹にたまる水の量はとても多く、病院で抜いてもらっても3日後には呼吸が苦しくなるほどたまりました。大学病院での検査と抜水は週に一度で、その間に一度、かかりつけの先生のところで抜水してもらいました。水を抜いてもらうたびにちいは痩せてしまいましたが、呼吸が少し楽になり、ごはんも人の手からならば少し食べられるようになるのです。ちいはいつも、用意されたごはんの半分を食べるのがやっとだったので、れんが自分のごはんを食べ終わるとすぐに、ごはんをもらっているちいのところにやってきました。人の手から、いつもと違うおいしそうなごはんをもらっているちいを羨ましそうに見ているれんがかわいそうで、つつい少し分けてあげたりしていたので、れんの体重が増えてしまいました。

ちいは人の食べるお肉や魚を混ぜたドッグフードを、二口、三口食べては「もういい」といって向こうへ行ってしまう。ちいの胸とお腹の水はたまり続け、苦しくなって床に伏せることができないため、ちいはおすわりの姿勢のまま、うとうとと眠り、体を支えていた前足がカクンと折れ曲がって、あごを床にぶつけてしまいました。水を抜かなければ、横向きに眠ることさえできなくなってしまいます。水だけは自分でたくさん飲みましたが、栄養をとらせなければ、と私たちは焦りました。ちいが食べるものならば何でも、食べさせました。さつまいもや、人の赤ん坊が食べる薄い味の丸くて小さなビスケット、クリームチーズや口当たりの良い果物など。ちいにはもう時間がないのだと思うと、普段は絶対に食べさせない、甘いアイスクリームまでなめさせました。ちいの命を維持するには、カロリーが必要です。ちいは胸とお腹の水をつくるためにどんどん体の中の貯えを使ってしまいます。ちいは、甘いアイスクリームよりも、さっぱりした牛乳入りのアイスキャンディーが気に入ったようで、喜んで食べました。

薬はどうしても飲めないで、錠剤をスプーンで砕いて粉状にし、はちみつに混ぜてちいの歯の横に貼り付けました。甘いので、なんとかなめてくれましたが、あまり上手に飲み込めず、口の端からいつも、薬を溶いた黄色の液体が少しずつ洩れてしまい、ちいの寝床を汚しました。

手術のできないがんを抱えてしまったちいが、その最期をむかえるまでの間の痛みや苦しみを、少しでも軽くすることはできないものかと、毎日考えました。特に、週に一度の大学病院での検査の日には、いつも苦しい選択をせまらせることになりました。抗がん剤を使って、奇跡が起こることに望みをかけるのかどうかです。奇跡が起こらなければ、ちいの体に負担がかかり、死期を早めるにちがいありません。

人といぬでは、がん治療に違いがあるのかもしれませんが、抗がん剤を使わなかった義父は手術後一年くらいで亡くなりました。実家の母は、二度の手術後も抗がん剤治療の苦しみに耐え、やせ細りながらも生きています。食欲のないちいが、抗がん剤の毒に耐えられるとはどうてい思えず、体に負担の少ないという放射線をがんの部分に照射してもらい、胸とお腹の水を抜いてもらって帰宅しました。病院から帰るとちいは三日くらいは呼吸も楽になり、少しですが食べることもできるようになります。このままたんをだましまし、あと数か月、あと数年、なんとかちいが生きていくことはできないものかと期待しました。苦しそうなちいを見ているのは辛かったのですが、ちいがいなくなってしまうことを考えるのはもっと辛いことでした。

4回目か5回目の放射線治療のときに先生が、

「ほんの少しだけ、抗がん剤をつかってみましようか？普通の量の10分の1くらいですので、体への負担はないと思います。放射線の効果を助けるためのものです。」

と提案してくださったので、使ってください、とお願いしました。

治療後、ちいはいつものように少しだけ元気が出て、リードを引っ張って病院を出ました。

夜

ちいが初めて抗がん剤を使ったその日の夜、仕事を終えて帰宅すると、ちいは酸素ハウスの中で休んでいました。扉を閉められていたので開けてやると夫が、

「開けちゃいけないよ。ちいはもう歩けないし危ないからね。」

というのです。でも、おしっこやお水をはがまんしているかもしれないので、開けてちいを出してみました。夫の話では、ちいはおしっこのときに後ろ脚をうまくたためなくなってしまって、困っていたというのです。私は、歩かせなければますます脚の筋肉が弱ってしまうと思い、ちいを寝たきりにさせたくないと思いました。豚肉のゆでたものを少しだけちいは食べたので、いつものようにはちみつで薬を練って歯の横に付けてみましたが、ちいが口を動かさないので、指で少しだけ水を口に入れてやりました。

トイレまで歩けないと思い、酸素ハウスの前にトイレを置いたのですが、ちいはそれを拒否するようにいつものトイレまで自分で歩き、おしっこをしました。そのあと居間の真ん中の座布団に静かに伏せて、ちいは家族の様子を上目づかいでじっと見ていました。なんとなく目がうるんでいるようだったので、

「ちい、泣いているの？」

と話しかけ、ちいの頭をなでました。私は急に気弱になり夫に、

「ちいはもう、だめかもしれないね。」

と言いました。夫は、

「何言ってるんだ、ちいはまだ、生きてるんだよ！」

夫は強い口調で言いました。ちいが聞いているのに、弱音を吐いたりしてはいけないのです。

抱っこ

その夜のうちに、ちいは亡くなりました。ちょうど夜の12時に、家族が見守る中で、ちいは静かに倒れてそのまま息を引き取りました。ちいのがんが見つかったから、一か月と20日間の命でした。

真夜中だったので、すぐそばで眠っていたれんは、ちいとお別れに気づきませんでした。それほどちいは、静かに亡くなったのです。翌日れんは、ちいの様子がいつもと違うことに気づき、ちいの亡骸に向かってわんわん吠えました。ちいねえちゃん！ちいねえちゃん！...と、動かなくなっただちいを呼び続けました。

私は、ちいがいつも抱っこをせがみにきたことを思い出し、ちいの体があるうちに抱いてやらなくては、と何度もちいを膝の上に抱きあげました。命を失ったちいのからだはただひんやりと重く、腕の中にその重みがありました。ちいはまだここにいる、ちいの心はまだこの部屋の中にある、そう思えてならないのでした。

闘病中はがんのせいでとても体が熱かったようで、ちいが暑がるので寝る時もちいを抱いてやることはできませんでした。私はそれがとても寂しかったのです。一緒にベッドで寝ることもできず、居間の床に寝床を作って、娘も私も、ちいが暑がらないように、ちいとからだがかくつかないようにして寝ていました。

ちいが亡くなってから三日目の午後、葬儀屋さんが庭に火葬車を持ってきて、ちいを焼いてくれました。少し風の強い日でしたが天気は良く、旅立ちには良い日でした。息子も来てくれて、家族全員で見送りました。...といっても、ちいは自分の死に気づいていない様子でした。それから数か月の間、ちいは居間の中や、二階に続く階段をちょろちょろと探索していたようでした。私の仕事にも毎日ついてきて、

「わたしはここにいるよ。」

と、話しかけてくるような気がしました。生きていたときと同じように、ときどき抱っこをせがんでくるようでした。わたしは見えないちいを腕の中に抱いては、見えないちいの顔を眺めていました。

お別れ

もうすぐあれから一年、いつのまにかちいは家の中の探索も、仕事についてくるのもやめたようでした。毎日もらうごはんのお茶碗やお水の入れ物がすごく小さかったり、自分の写真の横に花が飾ってあるのを見て、何か気付いてしまったのかもしれませんが。れんとの喧嘩も、みんなで散歩もできなくなったし、それでは、と思い立って旅に出たのかもしれませんが。何か楽しいことを見つける旅に...。ちい、どうか良い旅を！